

## 博士論文要旨（平成28年度）

平成28年度に提出された博士論文は、課程修了によるもの2編と、論文提出によるもの1編、計3編である。

各論文の要旨を次に掲載する。



《博士論文要旨》  
(課程博士)

## 板木の科学的研究

安 藤 真 理 子\*

法隆寺の百万塔陀羅尼（764年）をはじめ、春日版や五山版等の各經典、お札などの摺刷物、版本、浮世絵等、木版印刷技術によって生み出されたものは多岐にわたる。このように、木の板（板木）に文章や絵を彫って版を作る凸版印刷技術は日本の宗教・教育・文化芸術に大きな影響を与えた。その木版印刷技術の根底にあるのが板木である。しかし、現在に至るまで、刷り上がった紙の印刷物だけが研究対象となり、木版印刷技術が集積した板木そのものは研究対象とされてこなかった。これまで板木を論考としてまとめた研究はほとんど無いのが実情である。板木の重要性は永井一彰氏が「板木には出版書肆や職人が何を考え、その板木が彼らによってどのような扱いを受けたかが形として明確に残っているのである。（永井2014）」と述べているように、板木には職人の知恵、工夫や技といった様々な痕跡が残されている。しかし、木版印刷が主流でなくなった近代以降、板木は無用の長物となり、劣悪な保管環境に置かれる場合がほとんどである。板木は文化財とみなされず、災害や生物被害により日々失われ続けている。

日本で約1300年続いた木版印刷を支えた職人達に接触する唯一の方法は、元来の目視による調査に加え、板木を科学的に調査研究することであり、できる限り良好な状態で板木を保存することである。板木が残っていなければ過去の職人達が何を考え、どのように板木を扱ったか、知恵・工夫・技は分からないのである。

本研究における新規性と独自性は、“板木の保存”を目標に見据え、文化財保存科学の観点から板木そのものに焦点を当てた研究であり、樹種同定、板木に発生したカビの同定、3次元デジタル、X線 CT スキャナなどを用いて板木を科学的に研究した点にある。板木を文化財として保存していく為には、これらの科学的手法で板木自体と板木に遺された職人の知恵・工夫・技を解明し、板木に対しての理解を促進させる必要がある。これはまさしく文化財を後世に伝える自然科学的研究である文化財保存科学の領域であり目指すところであると考え研究へ至った。

第1章 日本木版印刷史と第2章 板木の制作では、板木が持つ歴史的な役割と価値を明らかにし、彫師・摺師がどのように板木を制作して木版印刷を成し得ているかを示した。第3章 板木の構造では、板木の樹種同定を行い、定説通りのサクラが板木本体に使用されている事を報告する。さらに板木の樹種同定では新出のカバノキ属が検出された事から、奈良大学博物館所蔵の經典板木が中国で制作された可能性があることにも言及した。また木目に注目し、板木は必ずしも板目材を使用するのではなく、資金等の都合で板目以外の材も使用する可能性を示した。板木本体だけではなく、端食の樹種にも注目したことで、今まで実証されてこなかった針葉樹製の端食の存在を科学的に明らかにした。そして、板木調査の過程で発見した端食の型式について多様性を認め、平成28年度 \*文学研究科文化財史料学専攻博士後期課程

新たに確認した2形式8種類の端食について、さしものの観点からの調査をおこなった。第4章板木の保存では、生物劣化で失われていく板木について言及し、生物被害に対する対策を述べると共に、板木を保存するための科学的な強化処置を紹介した。第5章 3次元計測を用いた板木に遺された知恵・工夫・技の解明では、立体物である板木の調査には3次元計測が非常に有効である事を示した。0.02mmの精度で表面観察が可能な高精細3次元デジタイザ、内部構造を360°かつ断層的に観察が可能なX線CTスキャナ等の最新機器を用いての板木研究は本研究が初めてである。3次元デジタイザでは、得られたデータから断面図を作成する事で、今まで文献での図式化に留まり実際の板木から観察が不可能であった薬研彫の形状を提示し、さらに薬研彫の角度から職人たちの作業時の位置を推測するに至った。X線CTスキャナでは、板木内部に遺され金釘の方向から板木の制作手順、接合された材から版権移動の様相や施された加工や入木に対して得られたデータと文献史料を照らし合わせる事で板木の本来の形状、摺刷内容の異同について言及した。また、木工師とX線CTスキャナで得られた画像を見て議論する事で、継ぎの技術確認だけでなく、板木の制作過程にまで言及する事ができた。今回使用した3次元デジタイザやX線CTスキャナは韓国、中国を始めとした各国の文化財分野での導入が検討されており、本研究は東アジアでの板木研究においてこれら機器を使用した先駆的な研究と言える。

木版印刷の根本である板木を科学的に調査研究する事は板木研究のみならず、木版印刷史、書誌学、近世文学、浮世絵研究、版本研究、文化財保存科学の更なる発展に繋がる事は明白である。板木研究は元来の目視による調査が基本であり、板木そのものに常に接して着目していないと科学的な手法を用いた研究を行っても、研究手法の選択や得られた情報の解釈を誤ってしまう可能性がある。しかし、目視調査と共に科学的な調査研究、専門家との意見交換を行う事で、より詳しく高度な職人の知恵・工夫・技といった見識を得る事ができる。このような総合的研究によって、版木研究の推進と版木の保存への貢献を目指したい。

《博士論文要旨》  
(課程博士)

# モンゴル国出土木製遺物の科学的保存処理研究

メンドバザル オユントルガ\*

## 1. はじめに

モンゴルでは、国際共同チームと国内チームによる発掘調査が年間100件を超えている。遺物の中には、瓦・レンガなどの保存処理を施す必要のない遺物もあるが、木製品や金属製品などのように、弱くて脆く、短時間のうちに劣化し、崩壊してしまう遺物も多く発見されている。

### モンゴルの発掘調査の現状

モンゴルでは毎年多くの発掘調査が行われ、数千年もの間守られてきた膨大な量の木製品が出土している。出土した木製品は、すぐに草原地帯の乾燥環境の中に置かれるので、極度の乾燥によって形状が変化したり、消失してしまったりすることが多い。

しかし、モンゴルでは、木製品の保存修復に必要な正確な知識・技術がないため、考古学者が自己流に管理して変形・消失させているのが現状である。

## 2. 研究目的

これまで詳細な研究が行われずに消失してしまった脆弱な木製品、中でも鮮やかな彩色木製品を発掘調査で保存することができれば、木製文化財の美術史・歴史学的研究が飛躍的に進展し、モンゴルの詳細な歴史復元が可能になるに違いない。そのためには、モンゴルの自然環境や出土木製品の特質に適した保存処理方法を確立する必要がある。

そこで、本研究の目的は、モンゴルに適した出土木材の保存方法を開発することである。具体的には、モンゴルの草原地帯で発見された出土木製品を研究対象に、草原から発見された出土木材の特質を理解し、草原地帯の極度の乾燥による収縮から木材を守り、発掘現場で安全に効率よく短時間で保存処理する方法を開発することである。

### モンゴル出土木製遺物の研究

ユーラシア大陸の北東部に位置するモンゴルでは、これまで幾多の遊牧国家が生まれた。これまでの発掘調査において、パジリク時代（BC720年～300年）からモンゴル帝国時代（AD1216年～1307年）まで、遺跡や時代の特徴を表す木製遺物が多く発見されている。

### 草原地帯で発見される出土木製遺物の特質

モンゴルの草原地帯で発見される出土木製遺物には、以下のような特質が見られる。

---

平成28年度 \*文学研究科文化財史料学専攻博士後期課程

- 常に低温で飽和水蒸気環境が維持された場合に限り、木材細胞がバクテリアや腐朽菌によって完全に崩壊することなく、水浸出土木材と同じように形状を維持して発見されることがある。
- 日本で発見される飽水状態の木材とは異なり、飽和水蒸気で満たされた木材細胞は含水率が低く、まだ空隙が残っている。
- 飽和水蒸気環境を維持して発見された木材は、彩色などが極めて良好な状態で残存しており、世界的に見ても大変貴重である。

### 細胞の劣化状態

図1に示すように、モンゴルの草原地帯において、飽和水蒸気環境で出土した木製遺物の細胞壁(A)は、表面に近い部分は分解が進んで細胞間層だけになっている。これに対して、内部(B)は細胞間層だけでなく一次壁・二次壁も健全な状態で残っている。

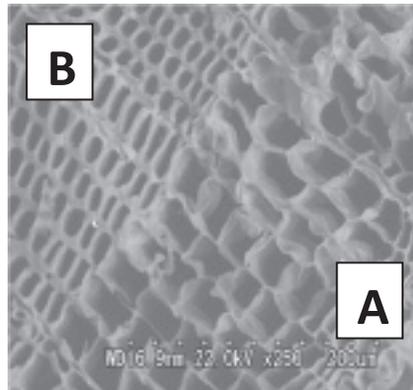


図1 モンゴルで出土した木製遺物の細胞壁

### モンゴルにおける木製遺物の埋蔵環境

遺跡において木製遺物が残るためには、木材腐朽菌やバクテリアが繁殖できない以下のような環境が必要である。

- ① 酸素が欠乏した地下水に満たされた状態
- ② 永久凍土のように極端な低温状態
- ③ 砂漠地帯のように極端な乾燥状態

モンゴルの自然環境は大まかには、3つに分けることができる。

#### • アルタイ山脈の森林地帯

森林地帯の出土木材は上記の①のように酸欠で飽水状態の環境で発見される。飽和含水率が約300%~500%、アルタイ山脈など高度のある永久凍土や氷河のように極端な低温森林地で凍結した状態や、きわめて飽和含水率が高い埋蔵環境から発掘されるため、発掘後水漬けにして保存する必要がある。湿度が低い場合組織のある良好な状態で出土されるが

環境による軟腐朽菌によって水漬け木材が表面から軟化・腐食し・カビが発生する現象が多い。

- **草原地帯**

草原地帯で発見される出土木材は上記の②に近い低温状態にあるが、必ずしも常時凍結状態ではない。飽水状態では無く飽和水蒸気の埋蔵環境から発掘されるので、木材の飽和含水率は約30%以下の場合がほとんどである。木材は地下から発見された場合も形状を維持して良好な状態で発見される場合が多い。これは、草原地帯の特質として地下が低温で湿潤な環境にあり、埋蔵空間は常に零下を前後する低温で飽和水蒸気環境が維持された場合に限って、木材がバクテリアや腐朽菌によって完全に崩壊することなく、水浸出土木材のように形状を維持したままの状態で見られることが多い。しかし、飽和水蒸気環境を維持して発見された木材は水浸け状態とは異なる。

- **砂漠地帯**

砂漠地帯で発見される出土木材は上記の③のように極端な乾燥状態が維持されている。木材は極めて乾燥した環境で見られるため、飽和含水率は5%~10%である。そのため、出土木製遺物は触るだけで崩れやすく、多くの場合は木材が変形し崩壊した状況で見られる。

本論文では、古くから東西交流の場になり、多種多様な遺跡が存在し、発掘調査も頻繁に行われる草原地帯の発掘調査で飽和水蒸気環境を維持して発見される出土木材の保存方法について提案する。

### **草原地帯で発見された出土木材**

モンゴルの出土木製品は多くの場合、飽和水蒸気に満たされた状態か乾燥状態にある。草原地帯では、地下空間で湿潤状態で発見される。木材は発掘されるまで低温で湿潤な地下空間にあり、飽和水蒸気で満たされている。飽和水蒸気に満たされて発見された木材は、草原の乾燥環境では発掘直後から乾燥が始まり短時間で劣化してしまう。草原地帯から発掘された出土木製遺物の劣化過程を検討するために、モンゴル西部・中部・東部の草原地帯で出土した木材を用いて、木材表面から内部へ5mm毎に切断して木材細胞の変化を走査電子顕微鏡（SEM）で観察した結果、表層では細胞壁を構成する2次壁（S1・S2・S3）が失われて、細胞間層だけが残っている。木材の中間および中心では2次壁・細胞間層が共に残って健全な状態である。

### **草原地帯で出土する木材の問題点**

モンゴルの草原地帯で飽和水蒸気環境を維持して発見された木材は、日本のような水浸状態とは異なり、外気の影響を受けて短時間で乾燥して変形する。飽和水蒸気に満たされて発見された木材は、モンゴルのような乾燥環境では発掘直後から乾燥が始まり短時間で劣化してしまうため、モンゴルのような大草原で発掘する場合には、乾燥環境の中で短期間に保存処理作業ができる方法の開発が求められる。

### 3. 草原の発掘現場で実施できる保存処理方法

糖アルコール含浸法とトレハロース含浸法は分子量が小さいため、木材細胞内に入りやすい。飽和水蒸気に満たされた木材や、乾燥木材にも入りやすい特徴がある。特に、トレハロース含浸法は、モンゴルの特徴である寒暖差の激しい乾燥した環境を利用して結晶化の促進が期待できる。

本研究の目的は、飽和水蒸気環境の地下空間で埋蔵していた出土木製遺物の保存処理方法を開発することである。草原地帯の発掘調査現場での保管、現地付近の保存処理に応用できる方法を考案することである。様々な保存方法を検討した結果、トレハロース保存法を適用することが、モンゴルの実情に最も相応しいと考えた。なぜならば、トレハロースは、結晶性が高いので、寒暖差の激しい乾燥したモンゴルの環境を利用して結晶化の促進が期待できるからである。

本研究では、発掘調査で適用できるトレハロースを用いた保存処理法を目指して、飽和水蒸気で満たされて発見される草原地帯の出土木材を、発掘現場で安全に効率的に保存する方法を提案し、以下のような保存処理実験を行った。

- ・ 加温した高濃度のトレハロース水溶液を用いる。
- ・ 表面張力を下げするためにアルコールを添加する。
- ・ アルコールを添加した高濃度トレハロース水溶液を発掘現場で洗浄瓶を使って出土木材に滴下することにより、効率よく木材細胞内部に含浸する。
- ・ 木材細胞に浸透したトレハロースは夜間の気温低下によって一夜で結晶することにより出土木材の収縮を防止する。

トレハロース溶液を用いて洗浄瓶で滴下した結果、トレハロース50%含浸では木材表面の1mm～3mm付近にトレハロースの結晶化が確認できたが、内部の細胞にはトレハロースの結晶が充填されていない部分の多いことが判明した。50%トレハロース水溶液にエタノール5%を添加した試料は表面から3mm～5mmにもトレハロース結晶化が観察され、内部の細胞に結晶が充填されている状況が確認された。トレハロース70%含浸では木材表面の1mm～3mm付近にトレハロースが確認できたが、3mmから内部にはトレハロースの結晶化が確認できなかった。70%トレハロース水溶液にエタノール5%添加した試料は、表面ばかりでなく3mm～5mmにもトレハロース結晶が観察され、細胞内の全表面がトレハロースの結晶で埋められている状況が確認できた。

### 4. 本研究の成果

モンゴルの草原では、飽和水蒸気に満たされた地下空間から発見される出土木製品が、出土直後に極度に乾燥した環境に曝されるので、発掘後短時間で変形することがある。また、モンゴルの出土木製品は、飽水状態で発見される日本の出土木製品と比較して含水量が少なく、出土後に極めて短時間で乾燥してしまうという特徴がある。そこで、本研究では、モンゴルの草原で発掘され、飽和水蒸気環境で出土した木材に対する保存処理方法を提案した。草原で発見される木材に対して、表面張力を下げて浸透力を高めた高濃度のトレハロース水溶液を浸透させることによって、トレハロースが木材内部で結晶化することで変形やひび割れなどを防ぐ可能性が高いことが分かった。トレハロース水溶液は、木材内部に浸透し結晶化することにより木材細胞を強化する。また、発掘現場において短時間で使用できるこの方法は、草原地帯で発見される多くの木

製品に適応できる可能性がある。草原地帯の寒暖差の激しさはトレハロースの結晶化を促進するために有効であることも判明した。以上のことから、乾燥気候や夜間の低温度下の気候のモンゴルにおいて、出土木製品を安定的に維持できる可能性が期待でき、環境にもやさしく、安価で安全に作業でき、短期間で行えるトレハロース含浸処理法が、モンゴルの環境において最も期待できる結果となった。

なお、本研究の成果はモンゴルだけでなく、ロシアやトルコ・東欧諸国などユーラシア大陸の草原地帯から飽和水蒸気環境を維持して発見される出土木材全体に適用できると考える。今後は関係各国の研究者とも交流の輪を広げ、適用範囲を広げてゆきたい。

《博士論文要旨》  
(論文博士)

## 仏像と地域史

—和歌山地域彫刻史の研究—

大河内 智 之\*

### 序章「仏像の移動とその実態—仏像・神像から地域史を読み解くために—」

仏像や神像などの彫刻資料は、大抵の場合、移動することが可能である。そして、造像以来、安置場所を違えずに現位置を保ち続けたかどうかを、直接的に証明する資料に恵まれないことも多い。それゆえにそうした資料を、伝来した「場」の歴史と関わらせて考察することや、また逆にそうした資料から、伝来した「場」の歴史を再構築するためには、慎重な手続きが必要となる。

こうした問題は、地域の中に残された仏像や神像を、地域に即していかに評価するかという課題意識のもとで前景化するものといえ、八尋和泉氏の先駆的な研究（「九州仏像の現所在と原所在—造立時の寺院を離れた仏像五例—」『九州歴史資料館研究論集』9、1983年）があるが、課題が共有されている状況ではない。

学問領域としての日本美術史は、近代期初頭に、国民国家の文化的統合の装置として成立、機能し（北澤憲昭『眼の神殿』美術出版社、1989年ほか）、天皇制の確立に絡む国家のさまざまな歴史遺物保護の動きの中で、美術史研究自体が国家の権威に基づく古美術保護（指定）のための資料提供と価値判断の役割を相互補完的に機能してきた（佐藤道信『明治国家と近代美術—美の政治学—』吉川弘文館、1999年、ほか）。こうした「国家の美術史」の中では、日本「独自」の美術様式の発展とその達成について分厚い研究蓄積がある一方、周縁部やマイノリティーの表象、民衆文化などが評価されにくく、戦後においても、皇国史観にかわる新たな歴史観の支柱が現れなかったといえる日本美術史においては、戦前までに諸作品によって組み上げられていた史的体系を引き継ぎながら、現在も研究の枠組みが維持されている傾向にある。

日本美術史の一分野である日本彫刻史においてもまた、彫刻資料の国家による指定と保護のための基礎作業が、戦前・戦後を通じて研究推進の原動力であり、例えばそこでは鎌倉時代を「我が国固有の彫刻を完成」した時期とし（国立博物館編『日本美術略史』、便利堂、1950年）、それ以降を彫刻の衰退期として捉えており、多くの江戸時代彫刻を含む庶民信仰の仏像や、民間の諸芸能の仮面資料、人形がほぼ研究の対象と見なされておらず、戦前の研究で構築されてきた評価の枠組みは今なお強固である。

こうした戦前までの研究の総括の機会を得ずに踏襲されてきた「国家の美術史」においては、中央集権的な国家観を背景に構築された中央—地方という枠組みもまた維持され、「中央」の「洗練された」彫刻様式の変遷が緻密に把握される一方で、周縁地域の作例は研究対象として評価されにくく、「地方仏」あるいは「地方風」などの言葉が研究上の用語としても用いられている。し

平成28年度 \*和歌山県立博物館主査学芸員

かしこの「地方仏」「地方風」という用語は、「都ぶり」に対する「鄙び」と同様に、優劣・上下の区別を前提としているし、それゆえにそうした見方に対してのアンチテーゼとしての「地方仏」研究も行われた。

日本彫刻史研究の上において、この中央—地方という視点は現在も踏襲され、克服されているとは言えないが、近年における作例研究の深まりは、そもそも単純な一つの「中央」の想定自体が困難になっていることを示しており、そうした「中央」をも一つの地域と位置づけて、各地域に根ざした作例研究の積み重ねの中で地域様式を捉え、相互の関係性を評価していく、より水平的な研究態度が求められるものと考えている。こうした研究態度において、日本の各地域ごとにおける作例研究の必要性は益々高まるものといえるし、またそうした研究が、美術史の領域に留まらず、関連研究領域においても共有されうる水準であることもまた、求められよう。

地域に残された仏像や神像が、地域における様式研究及び地域史叙述のための重要な資料となる上においては、それらがいかに地域性を保って伝来してきたのかについての見通しを立てる必要がある。こうした課題に対して、実際に元の安置場所より移動したことを確認できる仏像に着目し、その移動・非移動の条件を把握する作業を、14件の事例により行った。結果、仏像の異動の類型を次のようにまとめた。

- I、寺院の外護者となる地域の政治権力との関わりによる移動
- II、地域の政治権力の再編に伴う寺院の没落・廃絶による移動
- III、信仰の場の断絶後、需要に応じて移動
- IV、神仏分離による信仰の場の断絶による移動
- V、城下町等の整備と再編に伴う移動
- VI、本山末寺等の関係性の中、需要に応じて移動

やや重なる要素もあるが、こうした類型化によって、地域における仏像の移動の諸相が捉えられる。そしてこれらの移動には、次のような傾向があることが理解された。

- i、多くは信仰の場の断絶という特殊な状況に基づいて、仏像が移動する事態となっている。
- ii、移動する場合も地域性を失わず、同一荘園や同一地域内で移動する事例が多く見られる。
- iii、需要に応じて移動する場合、地域性を失って移動する事例がある。

こうした分析により、仏像の移動は多くは信仰の場の断絶という特殊な状況において発生し、かつ移動する場合も地域性を失わず、同一荘園や同一地域内で移動する事例が多く見られることを確かめた。すなわち地域の中で伝えられている仏像や神像など彫刻資料は、特定の寺社とのつながりや伝来史を明確にできない場合でも、所在する地域の歴史を物語る資料となりうるといえる。こうした前提をもとに、以下の和歌山県内の3つの地域を設定し、考察を行った。

## 第一部「高野山麓の仏像・神像と地域史」

### 第一章 高野山開創縁起から見る聖域としての高野山麓

### 第二章 薬師寺・大福寺の仏像群と感応山—高野山開創縁起に基づく聖域の復原—

### 第三章 法福寺阿弥陀迎接像について—高野山膝下における浄土信仰とその場—

### 第四章 成立期の丹生高野四社明神像について—鑄造神像とその原型—

高野山開創縁起に語られる丹生明神・高野明神によって弘法大師に布施された神領の範囲分析により、高野山麓一帯を高野山文化圏としてまとまりを持つ地域として設定した上で（第一章）、かつらぎ町御所薬師寺・同星川大福寺に伝来する平安時代の仏像群を一括的に捉え、江戸時代における伝承を踏まえ、忘れられていた廃絶寺院感応山寺を復原し、当地が高野山の聖域の北西端であることを明らかにした（第二章）。こうして把握された聖域を踏まえ、その南西端にあたる生石ヶ峰と一体の山塊である堂鳴海山に所在した廃絶寺院慈恩寺から伝来し、従来その造像背景が不明であった法福寺阿弥陀如来と菩薩の群像について、高野山の聖域の西端という象徴的な場で機能した阿弥陀迎接像であることを明らかにした（第三章）。最後に「丹生大明神告門」に丹生明神の降臨地と語られるかつらぎ町三谷に伝来した神像を分析し、同じく鎮座地である天野・丹生都比売神社祭神像と木型・鑄造像の関係にある希有な作例であることを明らかにして、現存最古の丹生高野四社明神像として位置づけるとともに、天野地域と三谷地域の密接なつながりを示した（第四章）。

## 第二部「熊野三山の仏像・神像と地域史」

### 第一章 熊野地域の聖地形成と熊野信仰の展開

### 第二章 熊野の神像とその図像継承

### 第三章 滝尻王子の滝尻金剛童子立像について

### 第四章 東光寺不動明王二童子像と熊野本宮

古代における熊野地域の聖地形生の経緯と、中世の熊野信仰の成立と展開について概観した上で（第一章）、熊野地域に分布する平安時代前期～中期造像の神像（熊野速玉大社、熊野本宮大社、熊野三所大神社、熊野那智大社の各神社所蔵）を紹介し、そのうち熊野速玉大神像と家津御子大神像の図像的特徴が各社で共通することから、それが地域性を帯びた表現であるといえ、これら神像が造像以来熊野地域の中で伝来してきたことを示すことを明らかにした（第二章）。次に熊野参詣道沿いの信仰拠点である王子社祭神滝尻金剛童子像についてもその図像的特徴に注目することで、その姿が熊野の神域の結界を守る武装神像として設定されており、またそうしたイメージが地域における武士の信仰言説（秀衡伝承）の形成に結びついた可能性を提示した（第三章）。最後に、湯峯温泉東光寺に伝わった不動明王二童子坐像についてその像内銘とともに検討し、その伝来情報の博搜により江戸時代の神仏分離により熊野本宮より伝来した資料であったことを明らかにした上で、従来不明であった寛正年間における本宮の火災とその復興造営の状況を復元的に考察した（第四章）。

## 第三部「荘園・村の仏像・神像と地域史」

### 第一章 鞆淵八幡神社の八幡三神像について

### 第二章 伝法院の大日如来坐像について—鎌倉時代後期・根来寺周辺の造営活動—

### 第三章 宝勝寺十一面観音坐像と南北朝時代の安宅荘

### 第四章 歓喜寺地藏菩薩坐像（胎内仏）について

第三部では紀伊国内における荘園や村という地域的まとまりに着目して、四つの地域を取り上

げた。第一章では石清水八幡宮領鞆淵荘の荘鎮守、鞆淵八幡神社の八幡三神像を鞆淵荘の成立段階に遡る資料として位置づけ、石清水八幡宮の荘園経営の実態を明らかにした上で、その図像的根拠となった、今は失われた石清水八幡宮の神像の姿を復原した。第二章では大伝法院（根来寺）領山東荘内の伝法院に伝来した大日如来坐像を通じて、鎌倉時代後期における大伝法院（根来寺）勢力の高野下山ののち、寺領荘園内の寺院造営による支配強化が図られていた実態を把握した。第三章では日置川河口部安宅荘内に立地する宝勝寺の十一面観音坐像について、像内銘の分析と、同一地域に伝来した同時期の作例の一括把握を通じて、地域支配に関わった安宅氏による荘園開発の実態を提示した。第四章では、石垣荘歡喜寺村（吉原村）の歡喜寺に伝来する地藏菩薩坐像について、地域の武士団湯浅党が造像に関わった類似作例との比較により、歡喜寺創建期に湯浅宗氏が関与して鞆仏に納置された経緯を復原した上で、江戸時代に像内より発見されたのち近世、近代を通じて地域住民の手によって手厚く守られてきた具体的な状況を提示した。

## 終章 仏像と地域史

第一部～第三部における考察を行う上で用いた研究手法は次の通りである。

- ①資料の形状・構造・様式的特徴に基づく制作時期の判断（全章）
- ②伝来史の博搜（一部二章、一部三章、一部四章、二部四章、三部二章）
- ③銘記の分析（二部四章、三部三章）
- ④作品群の一括把握による資料化（一部二章、一部三章、二部二章、三部三章）
- ⑤図像的特徴の比較と類型化（一部四章、二部二章、二部三章、三部一章、三部四章）
- ⑥伝来した場の歴史・環境と資料の象徴的機能の整合化（全章）

このうちの⑥が、仏像・神像から地域史を読み解くという本論主題を概念化したものである。このように整理した上で、あらためて2つの地域の仏像（二章第1節「かつらぎ町教良寺・阿弥陀寺の仏像と地域史」、第2節「紀の川市・中津川行者堂（極楽寺）の仏像と地域史」）を取り上げ、場の歴史・環境とそれら資料の象徴的機能を整合させることで、当該の地域史叙述のための核となる資料たりうることを提示した。

以上本論においては、地域において伝えられてきた仏像や神像について、彫刻史的方法論により適切に資料化を図った上で、伝来した場の歴史・環境と、それら資料の象徴的機能を整合させることで、地域史の新たな一面を叙述しうることを明らかにした。事例として紹介したのは全て和歌山県下の作例であり、仏像と地域史という主たる論旨とともに、和歌山地域彫刻史研究としてのまとまりをも提示した。

地域史研究における「地域」は、「地方（ローカル）」、「地域（リージョン）」、「広域地域（エリア）」に区別され、大きな容れ物や場として、独自の歴史的ダイナミズムを示すきわめて求心力の強い一つの単位として、また外に向かって広がってゆく緩やかなネットワークの様相をみせる広がりとしされる（濱下武志・辛島昇「『地域の世界史』の視点と方法」（同編『地域史とは何か』、山川出版社、1997年）。本論で設定した「地域」はリージョンやエリアであり、そうした空間的広がりの中に所在する仏像・神像を通じて、まさに歴史的ダイナミズムの一端を把握することに努めた。

はじめに示したように中央集権的な国家観に基づく中央—地方の評価の枠組みでは、中央からの様式の伝播とその受容のあり方は把握される一方で、その評価が造形上の洗練—非洗練の判断に留まる傾向がある。そうした評価の中ではこぼれ落ちる人々の記憶の断片が、仏像・神像には多数蓄積されている。そうした記憶（歴史）の再発見を通じて地域性が浮かび上がり、従来自明ではなかった忘れられた「地域」が立ち上がる事例も確認された（一部一章～三章）。

仏像や神像が持つこうした資料価値への視点は、当該地域の歴史を証明する根拠として、それら仏像・神像を地域内において維持・継承するための理論的、心情的な裏付けともなる。地域における自立的な彫刻史研究の重要性は、こうした観点から極めて高いものと考えている。

仏像から見る地域史とはまさしく、仏像とつながり、そして仏像を残し続けた人々の生きた痕跡を、仏像から読み取るということにほかならない。本論で示した研究手法は、日本彫刻史研究の裾野を広げるための、新たなまなざしの提示につながるものと考えている。